

二八年高麗から奉つた上表に「高麗王教<sup>ユ</sup>日本國<sup>ニ</sup>」といふ文句のあるのを皇子が御覽になり、その無禮を咎めさせられ、表文を破り、棄てさせられたのは、即ちこの御通達の程を證明して居るものに外ならぬ。

かゝる次第で我國に於ける讀書や書記のことは、百濟の人が來朝して漢字漢文を教へたことによつて開かれ、阿直岐や王仁は我が國に於る書首フミノオヒトの祖となり、その子孫は他の歸化人の子孫と共に所謂史官となつて文事に携はり、記録のことに従事した。獨り半島を通じてのみならず仁德天皇の御代以來我が國人の直接支那の江南、即ち東晉に通じたものもあり、その有様は南朝の梁の頃まで絶えなかつたから、この方面からも支那大陸の文化の輸入せられたことはいふまでもないが、ついで隋の時代に我が聖德太子が小野妹子を使としてこれに通じさせられてから後は、この勢また俄に盛んになり、引續いて唐の時代には遣唐使や留學生の派遣が絶えず、道眞の時になつて始めて止んだことは周知のことである。かくして大陸文化に接し、これに親しむ間に、我が國人のその學問を修める者も漸く出來て、繼體天皇の時には百濟の段楊爾が來て五經の學を立てたのを始め、朝廷でも學術を振興するに汲々とし、遂に唐の文化を最も盛に模倣した奈良朝代を出現するに至つたことは改めて詳述するに及ばない。

かやうにして我が國に於ては、我が固有の文化がまだ獨得の發達を遂げ切らない間に、朝鮮半島や支那大陸から既に長い間を経て大に發達進歩を遂げた文化が輸入せられ、その影響を受けることになつたのであるが、この間に於て注意すべきことは、假令發達の程度はなほ低かつたとしても、我が固有の文化、若しくは固有の文化を作り出す根柢たる固有の精神はかゝる情態に於てもなほ我が國民の間に確固として保有せられ、外來文化のために損傷せられず、却つて滔々として流入して來る外來文化を巧みに消化して、獨得の我が文化を作り出したことである。こ